

武蔵野日曜集会

神のドラマ

——ローマ書第8章18～30節——

1978年6月25日(武蔵野)

小池辰雄

苦難と栄光 苦難を通して歓喜へ 終末的な世界 わがうちなる現在完了 その中に自分を入れてしまう 十字架でキリストの中へ入ってしまったている 万物の呻き 嘘と真 終末的な望み 聖霊の呻き 執成しの祈り 根源現実を生きる 一切のことは最善に 予知・予定・召命・義認・栄化 神の栄光のため

【ロマ8・18～30】

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存れり。22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

● 苦難と栄光

ロマ書8章というのは正直、大変なところです。平伏して読むよりかしようがない。



18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。

「われ思う」というのは、思いはかるという「ロギゾマイ」という字ですが、今の時の「苦難」(アティマタ)は、来たらんとするところの「栄光」(ドクサー)、顕るべきところの「栄光」に比ぶるに足らない。我々の中へと顕れる。もう少し突っ込んで言うと、再臨のときに私たちの中に体現せんとするところの栄光というような、突っ込んだ意味をその奥に掴んでいると思います。ということは、パウロは既にそのキリストの栄光を内に持っている。だから、こういう盛んなことが言えるんです。

苦難というのは、誰でもがなんらかの意味において苦しみ悩みを持っている。問題はそれをいかに体験するかということです。苦しみ悩みがより少ないのが幸せであると、普通の人は思っています。そうではない。その苦しみ悩みはいろいろある。これは本当に千差万別です。正に「人生は小説よりも奇なり」というドラマであります。だから、今日は題に「神のドラマ」と書いた。ドラマといえど何と言ったって、シェークスピアのドラマは大したもんです。しかし、シェークスピアのドラマよりも、我々自身がドラマを生きているわけです。

事柄の大小、軽重、種類ということをいくら詮索し、また、それをよりよく相対的にしようとしたって、そんなことは一つも解決にならないばかりか、反って終いにはくたびれてしまつて、人生に失望してしまう。やけくそになるようなもんです。どんな小さいことでも、どんな大きいことでも、どんな種類のことも——私なんかもう70年以上生きてきたから、いろいろなことがありました——その相対的なプラスもマイナスも、これをどのようにに体験するかということだけが問題なんです。その体験の仕方でもって、その人は本当に人生のドラマを勝った人であるか、負けた人であるか、ということになる。

ゲーテは相対的に言つて、非常に幸福な人だとみんなに思われている。順境に竿さしてね。けれども、彼は

「生涯で、本当に自分はうれしい、平安である、平和であると思つたのは二週間く

らいなものだ」

と言つた。そうすると、ある人は

「ゲーテという人はまことに気の毒な人だ」

と言う。そうではない。彼も決していわゆる幸福なんていうことを考えていたのではない。でなければ、あれだけの偉大な詩は作れない。また、あれだけの仕事はできない。彼もやはり、人生をいかに経験するか、体験するかということに心を用了た人の一人であります。

ダンテのごときは、それとまた反対に、誰が見ても本当に彼は——私は「ダンテの苦難」というのを書きましたが——青年時代も、壮年時代も、晩年においても、ほとんどあらゆる種類の苦難にでつくわしている。それを乗り切つて、人生という悲劇を喜劇、喜劇、コ



メデーである」と逆説的なことを言つて、『神曲』を「コメディア」と言つた。

●苦難を通して歓喜へ

ベートーヴェンも一度は自殺しようと思つた。音楽家が聾つんぼということは致命的ですから。耳がだんだん悪くなつて、とうとう聞こえなくなつてしまった。ドナウ河に身を投じようと思つて、遺言状まで書いた。けれども、彼は思いとどまりました。この音楽のゆえに。自分は生涯をかけて音楽と取り組んでいるんだから、これを悩める人、悲しめる人のために自分は捧げたい。彼の偉大な曲は全部、聾になつてからの、1800年以後のものです。そして、

「苦難を通して歓喜へ」

と彼は手紙の中に書いた。そして、運命の首を取つ捕まえてやろう、この神にどこまでも自分は信頼して進んで行くんだと。そして、

「友よ喜べ、喜劇は終わった」

と叫んで、彼は天界に往つた。これも彼は「喜劇は終わった」と言つた。ベートーヴェンも、ダンテも、そういう苦難の勝利者である。ゲーテも

「自分は次の世界に往くときに、自然は私にまた別な形式（フォルム）を与えてくれて、更に生き続ける。太陽が沈んでも、なおまた昇るが如く。」

と言いました。

どうして、この日本にはそういった偉大な魂が本当に出てこないんだろうか。結局、聖書をいい加減にして、相手にしないからです。この大東京に聖書売っている本屋が数えるくらいしかない。何しろ、これに食いつかなければ、青年はダメです。これは原動力ですから。パウロが

「今の時の苦難はいくらでも来てみる。逆に、来れば来るほど力が出てくる」

と言つた。また、日本のある儒者も言いました、

「力ためさん。いくらでも、苦難は来い」

と。いろんなことにでつくわして、行き詰まれば行き詰まるほど逆に、この世に絶すれば、天的な力が俄然臨んでくる。そのような信仰でなかったら、もう信仰なんてやめた方がいい。パウロは、

「現在のこの苦難は、この歴史の終りにやって来るところの、上から我々の中へと

臨んで来るところの栄光には到底比べることができない」

と言っている。苦難の闇は消えてしまう。既に今、この栄光は来ていて、闇の中に光が貫いている。レンブラントの絵のように。

もう、18節を読むだけで、なにか力が来てしまうんだよな。そうでしょ。「顕われんとする」とは、もう既に現れているから、パウロは言っている。単なる希望ではない。願望ではない。



そういう苦難です。まあ、暇があつたらまた、『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第二巻1976年刊）のダンテのところを読んでみてください。

●終末的な世界

¹⁹それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

この「造られたる者」（プティシス）とは、人間もみんな入れた万物という——いろいろな解釈がありますが、この場合は——被造物のうちの特に自然が主体になっていると見る見方が多いようです。内村先生もそれに賛成しておられます。

イザヤ書11章1節に、「二つの枝」と言つて、キリストを預言しているところがあります。そして、このようなメシヤがやつて来ると、6節以下に、

「おおかみは小羊と共に宿り、豹はやぎ小山羊と共に伏し」

と。非常に驚くべき樂園のことがそこに書いてある。自然界も——今はテレビや映画にも出てきますね——いろんな弱肉強食の現実がある。動物界、植物界、人間界、これが食いつ食われつということだ。命の保存のために、やむを得ざる現象が起きている。神さまの被造物の中には、まあこんなにくさん、蛇だとか蜘蛛くもだとか、いやらしいのがたくさんいるね。けれども、いやらしいなんて言つたつて、あれはみんな神さまが造つたんだ。被造物というなら、全部それが入るわけです。これは被造物ではないなんていうものはない。そういった弱肉強食の、またいやらしいと思われるようなものがたくさんある。全く、その被造物の世界そのものがドラマである。自然界がドラマである。けれども、その矛盾構造でありながら、それを天国に化するものが一つある。それは後で言うことにいたしましょう。

とにかく、これは、神の子たちが来て、そして、自然界もみな幸いになる。キリストを中心とした神の子たちがやつて来る。その中にクリスチャンも入るでしょう。多少それに連関して、コロサイ書3章4節に、

「我らの生命なるキリストの現れ給うとき、

再臨のときには、

汝らも之とともに栄光のうちに現れん」（コロサイ3:4）

とある。

パウロはやはり非常に終末的な世界を、もちろん望んで書いているわけです。そのときには自然界も栄光に包まれる。しかし、自然界がそのようにおかしくなった一番大事な根本の原因は人間の罪性にある。

それを神話的に言っているのがアダムとイブの失樂園です。ああいうのは相対的、歴史的現実ではないですよ。神話的、神学的な構造の話です。神話が神学を——神学と言つてはおかしいけれども——ちゃんと持っているんだ。



人間の罪性が原因である。それは現にそうではないですか。今のいろんな公害現象は結局――水俣病だつてそうです――みんなこれは間違つた文明がやっている。自然界が非常に損なわれている。汚染されているわけです。大体、このまま行けば、人類はだんだんおかしくなっていく。妙な奇形児だとか、精薄児だとか、いろんな現象がだんだん増えるでしょうね。テレビを見てると、本当に気の毒になる。あの人たちの親の気持ちを思うと。もう祈りと聖霊の力を持っていなければならぬ、本当は耐えられないですよ。

●わがうちなる現在完了

「教会は」なんて言つて、悪口を言いたくはないけれども、皆さん、それぞれで結構です。けれども大体、一番これぞという力を持つていなかったならば、ちよつと平和のように見えたり、きれいごとのように見えていても、それは人生の本当の勝利を与えることにならない。

地上では何も本当の解決なんか来つこない。来つこないけれども、解決しようというのが本当の実存だ。未解決の中でもつて本当の解決の姿を掴まえながら進んで行くのが、これがキリスト者の本当の実存なんです。地上には天国は来ないんだけど、天国を現じつつ――人の目にどう見えようと構わない――進んでいくのが、

「聖国を来たらせ給え」

という実存です。信仰はそういう現を持つていなかったら、希望も希望にならない。願望に過ぎない。

さつきから言つていとおりの、過去のどんなこともみんな逆に、これをプラスに体験しなおしてしまふ。現在においては、この苦難の中で天国の光をもつて勝つて行く。未来に對しては、そのような未来の未来完了をわがうちなる現在完了として持つている。それが本当の信なんです。本当にキリストを受けとつて信はそういうものです。それは真なんです。

無教会なんてのは、「真実、真実」と、人間的な気持ちの「真実」なんてものを一生懸命で言つているんだからね。藤井先生の悪口みたいになるけれども――私は悪口を言つていっているのではない――本当のことを言つていっているんです。

それが本当の信です。「真実」というなら、それが「信」です。どっちも「まこと」という。それが本当の現なんです。この現の中には、未来も、現在の現も、過去も、みんな入っている。この現は、本当の「永遠の今」という。本当の「現今」だ。

パウロが言っている現実、そういう現実でものを言っている。

「パウロは苦難のことをこんな言っているが、本当にその栄光はそんなだろうか。

パウロは夢見ているのではないか」

なんて、冗談言っちゃいかん。夢見ているのではない。パウロほど驚くべき苦難に遭つた



人はそうはいない。第一人者かも知れない。盛んなるかな、パウロさんです。よくこんなロマ書なんて残してくれたですね、正直。ロマ書、エペソ、ピリピ、コロサイ、それだけあればたくさんだ。

まあ、新約聖書は何と言つても大変なものです。皆さん、毎日読んでいますか。

「いやあ、たまらないなあ」

と言つて読んでますか。私は一体、バカなのかね。皆は利口すぎる。私はすぐ感激する。こないだも、大学生に言つてやったよ、

「この頃の若い者は、一体何を聴いているのか。私はこんなに力こぶを入れて話しているのに、なにか手応えがないようだが、どうなんだ」

と言つても、何も返事しない。もう学校をやめようかな。ゲーテが、

「全存在で感ずることが一切である。体感(ゲフュール)することが一切である。全存在で感ずることが一切である」

と言つた。あの「感ずる」というのはなにも、感情的なことを言っているのではない。

●その中に自分を入れてしまふ

19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

「切に慕いて」とはいい訳です。パウロは、自然のことはあまり言わないけれども、ここですら本当にパウロが自然のハートを深く共感している人だということが分かる。

日本人は、自然が美しいものだから、自然の美しさを外側からばかり見ている。「ああ、いいなあ」と。だけれども、中に入らなくては、心の中に。紫陽花あじさいというのは青い花だね。青い花というのはそうはない。何を見ても――葉を見ても、花を見ても――その中に自分を入れてしまわなければダメです。一つになる。自然の苦しみを、呻きをパウロは共感しているわけだ。共に感ずる。

こないだも、学校に教育実習生がやって来た。

「生徒の中に自分を置いて語るようなことになれば本ものになる」

と言つてやった。それは一週間や二週間ではしょうがないけれども。その気魄が、気持ちが大事なんです。子供の小説を書く人は、子供心に本当にならなければ書けない。そして、それを伸ばしていく。すくい上げていく。どうだこうだと外側から批評して、ひっぱたいて、あるいはおだてて、なんていうことだけではダメです。一緒になつて進んで行こうということが大事なんです。私は校長として、本当はそういう行き方をしたいんだけど、時間がないので申し訳ない。だから、私は校長の資格はないんだ。自分の大目的があるものだからね。本当の先生というものはみな、そこに本当に入つて、そこからやっていく。

20 造られたるものの虚無むなしきに服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり。



虚無に帰せられてしまったのは——敗退です、虚無です——それは自分たちが悪いんだけど。創世記3章のパラダイス・ロストが真先だ。それは結局、神さまの審判によっている。審判を招いてしまった。

21 然れどなお造られたる者にも

敗北のものにも、

滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望みは存れり。

これはキリストの故にです。パウロという人は何と言ってもキリスト中心ですから。彼は「光」とか「自由」とかいう言葉が大好きなんだ。彼が「キリストの僕」ということを徹底的に自覚していたから、キリストの光榮の中に、キリストの自由の中に入れられているものだから、全然、矛盾したような言葉だけれども、僕たることが本当の自由であり、自主であった。苦難を負うことが本当の光榮をうちに持つことである。こういうことは、手放しでは分らない。キリストが中心になっていないければ分らない。

●十字架でキリストの中へ入ってしまった

彼は自分の意志がないんだから、彼が僕であることは、もうキリストの中に入ってしまったていることなんだ。僕であることは、キリストの中に入ってしまったている。自分の意志がないんだから。投げ入れてしまったんだ。キリストの中に入っているものだから、キリストの驚くべき自由も、義も、愛も、光榮も、何だつてみんなやって来てしまう。こんな簡単なことではないではないですか。

キリストがそうなんだ。キリストが神さまの僕なんだ。キリストは、

「私の意ではありません。あなたです」

と言って、「あなた」ばかりでやっている。

「あなた一切です」

と言ったら、キリストは神の中へ入ってしまった。神とキリストはもう一如の姿なんだ。もうこんな簡単なことではない。

人間的な立派だの立派でないの、ダメだのダメでないのと、そんなことはもはや問題でない。ハッキリしてくださいよ。潔い、潔くないの、そんなことは問題でない。全部、十字架で中へ入ってしまったている。御霊の世界です。どうして、今のキリスト者はこんな簡単なことを本当に身につけないのでしょうかね。

私も無教会にいたときは、長いことかかったよな。

「罪、罪。十字架、十字架」

と言ってね。それが、入ることを知らないで、外側からただ問題にしている。

「キリストとは質的に違う」

なんて言つて。プロテスタント神学の妙なところにこだわっているものだから。



それよりか、中世のエックハルト、ゾイゼ、タウラーとか、それからその前の、アッシジのフランチェスコとか、ベルナルトとか、あのような人たちがよつぽと福音の世界に近い。ただ、パウロのように、キリストが非常にハッキリしていなかったところに問題性はあるけれども。

それから「テオロギア・ゲルマニカ」という、ゲルマン神学の素晴らしい本がある。これはルターが非常に驚いて喜んだ本で、彼自身が発見した本です。いつかも、私はゾイゼの言葉を引用しましたね。

「汝は太陽をその光にて知り、バラをその香りにて感じ、火をその炎によつて弁え、
斯くそのように、わが愛をわが死によつて悟れ」

という。「死」というのは十字架の死のこと。これはキリストの言葉ですよ。キリストの啓示をそういうように受けた。「太陽の光、バラの香り、火の炎」というのはみな、具体的に我々はそれにぶつかって、その中に溶け込むような感じ方です。キリストの贖罪の死もそのようにして受けて、私たちをキリストの愛の生命の中に投げ入れて分かる。だから、パウロは、「滅びの僕たる状であつても

手放しでは、自我という罪のゆえに私たちは滅びの僕だ。

けれども、それは十字架で贖われた。だから、本当の自由と栄光に入ることは残っている。」

と言う。残っているところではない。約束されているんだ。

●万物の呻き

22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

非常に深い愛の言葉ですね。共感同苦しているわけだ。

こないだ、ある人がちよつとした鯉をくれた。庭の池の中に放したら、猫が引つ掻いた。猫がとりそこなつた。鯉は横腹を引つ掻かれたものだから、血が出てとうとう死の断末魔です。私はこれを葬って祈った。一つの小さな生命も、これがまた新しき姿で甦ることをやはり祈らざるをえない。

とにかく、この地上は惨憺たるものです。だから私は、ドラマだと言う。人間界、宇宙の真理は、最高の表現はドラマなんです。聖書は、これはドラマです。最高のドラマなんです。絶対界から相対界に切りかかつて、これを救い上げようとしているドラマです。誰かそう言ったかな、

「聖書はドラマだ」

なんて。どこかに書いてあつたら、教えてください。皆さんみんな、聖書に取っ組んでくださいよ。



「取っ組み」といえば、ヤコブのヤボクの渡しの話がある。ヤコブというやつは、とにかく取っ組んで、神さまが勝った。それが「イスラエル」という名前だ。「神戦いたもう」とか「神勝ちたもう」という意味だ。神の勝利をいただいた。それが「イスラエル」という名前だ。我々はキリストの勝利をいただくわけだ。魂が本当に強くなつてくださいよ。強くなるということは力むことではない。キリストをいただいたら強くならざるを得ない。

なにか、クリスチャンが情けないよな。私なんか生まれつき一番弱虫なんです。私が生来、豪傑で強虫だったら、それはあなた方も「困ったな」と思うかもしれないけれども。あなた方よりも弱虫の泣き虫のがこういうことになつたんだから、何よりの証拠なんだ。

まだ、無教会時代は、内村先生、藤井先生なんていうと、正直、僕は恐かったよ。けれども、今はもう恐いものはなくなつてしまつたものな。ということは、傲慢ということではないですよ。皆さんも、若いひとがエラク傲慢になつて、「私は恐いものはない」なんて、そういう言い方をしては困る。どんなに、姿は謙虚であつても——謙虚であるのがいいんです——うちにキリストを宿している。もう、対処するところ、自由自在になる。

22……共に嘆き、ともに苦しむことを。

この「嘆き」という言葉はむしろ「呻き」と言つた方がいい。

「共に呻き、ともに苦しんでいる」

と。この「呻く」という言葉がところどころに出てくる。「嘆く」のは、まだ言葉があるかも知れないけれども、「呻く」というのはもう言葉がない。英語の「グローニング」、ドイツ語の「ゾイフツェン」という字です。これは説明できないんです、ドラマチックな構造の現実におけるところの呻きというものは。説明すると、中身が外れてしまふ。どうしても言い表し得ない。

皆さん、呻きがいろいろあるでしょう。いいですよ。その呻きは、本当の親友はある程度知ってくれる。共感してくれる。けれども、本当の「本当の親友」は、これはキリストだけ。キリストだけは呻きを共感してくださる。本当に共感できる人は、呻きを直すことのできる人です。ああだこうだと言つて批判する人は絶対にダメ。だから、書かれたる歴史なんていうものは、どんな歴史でもズレている。間違いだの、ズレだのがたくさんある。

●嘘と真

ゲーテが、

「デイヒトウング ウント ヴァールハイト」(詩と真実)

と言いました。「嘘と真」と。あれはうまく訳したね。彼は自分の過去を顧みて、自叙伝を書いた。それを「わが生涯より」と書いて、表題として『詩と真実』とした。実際こうであつたと。「詩」とは何ですかね。相対的現実の奥に、創造的な現実を、あるいは救済的な現実をそこに告白として盛り込んでいる。だから、ゲーテの『デイヒトウング ウント



ヴァールハイト』(『詩と真実』)という自叙伝はやはり、アウグスティヌスの『告白』と同じような性格をもっている。アウグスティヌスは全く神さまに向かって言っている。ゲーテのあれを読むとやっぱり、そういう本当に心をうつものがある。あの「嘘と真」なんていう訳し方は気がきいているけれども、その訳でもって間違えては困るよ。嘘を言っているのではない。昔のドイツ文学の先生はなかなか、そういうところは洒落^{しやれ}た言い方をする。告白なんです。

告白しているけれども、告白の奥はやはり呻^{うめ}きなんです。アウグスティヌスも、呻きながら讚美している。ただ「ワツシヨイ、ワツシヨイ」で、うれしがっているのではない。何ものも奪うことのできない歓喜はパウロも持っていますよ。けれども、パウロのその歓喜の奥に、深い嘆き、呻き、悲しみを持つている。それが本当の現実です、神の国が来るまでは。それでなかったら、この矛盾だらけの劇的な現実を目を閉じているようなことになる。その点で、相対的にいつて——どうだね、今のカトリックは知らないけれども——昔のカトリックの中には非常に立派なものがあつた。プロテスタントにももちろんありますけれども、ややもすると、プロテスタントは頭の方にズレてしまっている。

「信仰のみ」

なんて言つて、観念になつてしまふ。そんな、

「カトリックの、プロテスタントの、何のかんの」

はどうでもいい。とにかく、直接に、使徒の、パウロのこのような内的な深みを受けとつていくことが大事です。

²³然^{しか}のみならず、御霊^{はじめ}の初^{はじ}の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆^{なげ}きて子とせ

られんこと、即ちおのが体^{からだ}の贖^{あがな}われんことを待つなり。

「即ちおのが体の贖われんことを待つ」とハッキリ言いました。「御霊という初の実」ですよ。聖霊という最初の実を持つ。特に原始キリスト教の時代ですから、なおさらそれが非常に強い自覚だつた。今でも同じことです。御霊という第一の実だよ。そこからいろんな実がこぼれてくる。それはガラテヤ書5章に書いてある通りです。

「御霊の最初の実は愛である」

と書いてある。

その被造物の、万物の呻き、苦しみ、悩み、ドラマチックなものを天国的に変えるものは、この聖霊の愛なんです。イザヤ書の11章のところに霊^{たま}知^ちのことが書いてあるけれども、単なる知恵ではない。御霊の愛だけがこれを本当になす。そうじゃないですか。アッシジのフランチェスコは本当に愛の人だつた。狼がなついたりではないですか。

「狼よ、お前はこの町でそんなに人殺しをやつてはいかん。今度から食べ物をやるから人を殺すな」

と。手を出したら、狼も手を出したという話だ。小鳥は寄ってくる。そういう愛だけが本



当の天国を現ずる。それは聖霊の愛です。セント・ベルナードがやっぱりそうです。そういう人物でした。旅人を本当に懇ろにとりあつかった。昔の修道院というのは、ただ籠もっていたのではない。あの修道院というのはみんな自分で働いて、一生懸命に勉強して、福音を土台にしたところの健全な社会の種となっていたんだ。

●終末的な望み

「自ら心のうちに呻きて、神の国において、終末的には本当に神の子とせられ、即ち霊体をいただいて、霊肉渾然として贖われんことを待っているのである」

と。こんな約束と希望は福音の他にはないんですよ。

単に肉体を癒すことではない。全存在を健やかにすることがキリスト者の使命だ。みんな本当のお医者さんなんだ。魂の世界での医者になってください。

「我は癒す者なり」

と、エホバの神さまは言っている。霊肉渾然としてそれを現象したのがキリストです。それを望んでいたのが預言者たち。それを実証したのはキリストの直弟子たち。使徒行伝のステパノ、ピリポ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロたちです。

24 我らは望^{のぞみ}によりて救われたり、

この終末的な望みを抱いて救われているのだと。

眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争^いでなお望まんや。 25 我等

もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

まあ、分かりやすく言っただけどもね、パウロは。

「現に望みはもらっているではないか、望みが見えるではないか」

とまで、パウロに言ってもらいたかったな。

『忍耐をもて』とは、仕方がないな。忍耐をもつて耐え忍んで、まあ、望みに生きておこうか」

なんて、それでは苦しくてしょうがない。パウロのこの言葉は、真理は真理だけれども、あまりいただけないね、私は。

私は祈ったり思ったりすることをよく夢でみるよ。もちろん、現実には忍耐です。

「終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし」

とある。貫かなくてはいいかん。しかし、耐え忍ぶことのできるのは、力が来ているからです。力がなかったら、「耐え忍ぶ」なんて言っただけで、それこそ、終いにはくたびれてしまう。

あんまり私は簡単にものを言っただけで、悪いかね、これ。私は何年と経ってきてここへ来てしまっただけで、その私の今の現実をバンバン言っているものだから、皆さんはちよつと困るかも知れないね。まあ、あまり先取りしないでください。自分でひとつ消化していただくさいね。とにかく、私は水を割らずに言っておきますから。自分でだんだん体験しながら、



消化していくこと。

「やつぱり、先生の言ったのは本当だ」

と。頭で「本当だ」なんて言ったら困るよ。そうすると、ガタンと落っこちたりする。

●聖霊の呻き

²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを

知らされども、御霊みずから言い難き嘆き(呻き)をもて執成し給う。

これは最も素晴らしい言葉の一つです。ロマ書8章26節は私の兄貴が好きだったから、1921年のイースターに英語で布に書いたのがこれです。これは説明できない素晴らしい言葉です。

聖霊の呻きです。万物が呻いている。また、キリスト者が呻いている。しかし、聖霊が呻き給う。三つの呻きです。これは聖霊の執成しの呻きです。執成し＝祈り。異言だね。異言、霊言。異言だよ、聖霊の呻きというのは。陀羅尼のようなもの。これは註解書に書いてない。私たちの呻きをさらに執成して、キリストは知りましたもう。キリストは執成したもう。これが聖霊の呻きです。キリストの呻きを聖霊が執成している。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と、キリストが叫んだときに、聖霊は執成したでしょ。だから、

「わが魂を汝に委ぬ」

と、キリストは言われた。

もう、そういう世界に入ったら、言うことなしです。どんなに自分が解決できなくても、どんなに人に誤解されようと、どんな結果になろうと、大丈夫！ 救いは確かです。しかし、その救いは、キリストの故にであり、キリストが原因で目的です。私たちが救われるためではない。

どこまでも、神中心に生きたキリストです。我々はどこまでもキリスト中心に生きていく。やり切れない殉教の死を遂げて往った人たちが、十字架されて、そして讃美して往ったではないですか。聖霊の執成しがある。日本のキリシタン史で、あのカトリックのいろいろな殉教者たちには文句なしに頭が下がる。最後に全部、その解決の時が来ると黙示録に書いてある。ヨハネ黙示録は大変なものです。

「如何に祈るべきかを知らざれども」

と言ったって、頭でもって考えているんじゃない。

「祈りが祈りになりませんので」

ということですよ。聖霊が執成してくださっている。

「汝知りましたもう。汝贖いたもう」

と。その他にない。そして、涙の下から微笑んでいる。呻きがほほえみに変わる——お釈



迦さんの「蓮華の笑い」というのがある——キリストの大愛の中に入っただけ。どんな呻きも、キリストの十字架の呻きにはかなわない。キリストの十字架の呻きは一切の呻きを持っている。全くの孤独です。神にまで棄てられた如き十字架です。今のようなこんな雑駁な、民主主義だとか何とかいつて、「ワッショイ、ワッショイ」とやっている問題だらけの世の中で、こんな福音を語っていることが、学んでいることが一体、気違いみたいだね。

「あいつらはちよつとUFOの人間ではないか」
なんて（笑）。我々は本当の天的UFO、みたいだ。

20世紀はもうしょうがないです。20世紀は私はもう決して楽観していません。為政者が、人類が、我々一人ひとりが本当に神に立ち帰らないかぎり、20世紀は滅びに向かっている。みな仮面をかぶっている。偽りの平和です。仮面舞踏会みたいなものだ。藤井先生が言われた「真実」の本当の意味はそこにあるんでしょう。先生の「真実」という言葉を私は執り成したいんです、その意味から。うそつばちがたくさんあるからね。私の言葉は、平面的にとつたってダメですよ。

「今、先生はああいうことを言っているが、一体、その言葉の本当の奥の響きは何か」ということを聴いてくれないとね。

● 執成しの祈り

27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に
適かないて聖徒のために執成し給えおもばなり。

はい、これは26節を27節でまたハッキリと言った言葉です。執成しの内容です。凄ね、パウロは。パウロは26節から、「神・キリスト・聖霊」中心に特にハッキリものを言っている。それまでは、被造物の方からの呻きや、願いだの苦しみだのを言っているけれども。ウワーツと、角度が上から迫ってきた。

執成しの祈りは、聖霊に限らない。私たちがまたやる。ドイツ語で

「フュール・ビッテ」（その人の為に願う）

と言う。この執成しの祈りは、その人の中に自分を投げ込むということ、キリストの中に自分を投げ込むことが一つになるんです。あるいは、その事態の中に自分を投げ込む。これは離すことはできない。キリストの中に自分を入れるということ、その人の中に自分を入れるということ。それで力が来る。それでその人を救い上げて行く。その人の知ると知らざるとに拘らず。

ウエスレーのお母さんが、

「しょうがないな、ウエスレーは」

といって彼のために祈った。お母さんは一晩、



「主よ、祈りを聴いてください。本当に息子のために聴かれなければ、私はこの祈りはやめません」

と言って祈っていた。お母さんの祈りが遠くにいたウェスレーに響いた。彼は回心を起こした。同じ所にいたのではない。

その祈りが即刻、聴かれる場合と、また、何日後に聴かれるか、それはいろいろある。即刻聴かれないからどうだなんて、そんなことを言っているのではない。とにかく、棄身で祈ったことは必ず聴かれている。悲願に対して本願の角度から聴きたもう。だから、本当に力が来るんです、祈りに。

「これは本当に聴かれるだろうか、どうだろうか」

なんて。あるいは、不治の病があるね。どうしても、不治の病が、癌が治らない。治らなくたっていいよ。その奥で治っている。癌の奥で癌が治っている、その現実を受けとって、その魂の平安を祈る。どうせ、誰でも地上の生涯には最後のピリオドがあるよ。

●根源現実を生きる

とにかく、どの道、相対的現実には囚われてはダメだ。根源現実を生きて行きなさい。それでなかったら、ご利益信仰になるし、

「神さまがいるのに、どうしてこんなことがあるんだろうか」

なんて、疑問を生じるし。それはそうだよ。現象面を見たら、

「こんな世の中は一体、神さまは眠っているのか。不公平極まりないじゃないか。

一体、それで神を信ずるなんて、馬鹿げた話だ。お前たちは何を信じているか」

なんてなわけで、いろんなことを言われるよ。それに対して平面論理で答える必要はひとつもない。そんな世界じゃないです、この聖書のドラマの世界は。

そこまで突き抜けなければ。せいぜい百年の現実だし、問題だらけの世の中だし。それに一生懸命やっても、結果は出てこないし。いいんだよ、結果なんか考えなくて。本当の生き方だけをしていけば、どうなったって構わない。相対的ないろいろな工夫や道があります。それをいい加減にしろと言っているのではない。けれども、それで解決は来ない。もう一つ奥の世界を、終末の世界を待つ。これが何といっても言うことのできない呻きなんです。歴史の、万物の、人間の、聖霊の呻きなんです。

私だってさ、私の兄貴は私よりか生きてもらいたかったような人物だよ。それが27歳をもって逝ってしまった。本当はロンドンに行くはずのが、北京にやられたものだから。上役のやつが妙なことをして、それがこの兄貴の運命を消したんだ、相対的現実。割り切れんですよ、どう考えたって。しかし、そのような割り切れぬ現実を通して、私は救われた。だから、人生は、

「如何に体験するか」



ということが大事です。内村先生もあのルツ子さんを失って、割り切れないんだ。それで、内村先生には再臨の信仰がこのルツ子さんの死を通して力強く展開した。皆さんそれぞれ、いろんなことがあったでしょう。しかし、ただ後悔したり、はかなんだり、怨んだり、妬んだり、そんな必要はひとつもない。

いかに体験して、本当にキリストをつかんで、このキリストと共に呻いて、キリストの宇宙的な、聖霊の宇宙的な呻きを共にして、神の国を、最後の日を到来せしめるか。私たちはそれだけの聖霊の執成しの呻きにぶつかって、今度は聖霊と共に執成しの呻きの中に入って行かなくては。その呻きは、本当の歡喜をうちにまた宿すことができるんです。希望を、歡びを。パウロがエペソ、ピリピ、コロサイの書簡で書いている通り、勝ち得て余りある。何と盛んなるかなと。深淵の中には星空の星が宿るんです。深さと高さが一つになる。

●一切のことは最善に

28 神を愛する者、すなわち御旨^{みむね}によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

神を愛する者にはすべてのことが一緒に働く。「エイス アガトン」「善の中へと」入っていく。「アガトン」というのは、善悪の善ではない。善という字だけれども、いわゆる相対的な善悪の善ではない。もつと深い。「益となる」という訳は私は嫌いだ。損得の益みたいな、得することみたいで。そんなことではない。「善の中へと」というのは、もう一つハッキリ言くと、

「善の主体なる神の中へと入っていく」

と言った方がいい。神は至高善のかたです。「これは本当にいいことだ」と。「いい」という言葉があるね、単に善悪でなくて。「神さまの中へと」ということです。

「御旨によりて召されたる者の為に」というのは、「目的のために呼ばれたところの人に」というような言葉だ。

「神さまの目的のある御旨によつて召し出された人に、よろずのことが相働いて善となるのである」

と。それは全部、本当の意味で天的な結構なことになるというわけだ。さっき私が、

「全てのことは体験の仕方だ」

と言ったでしょ。だから、神を愛している者とは——もちろん、神に愛されているから愛するんだ——もつとハッキリ言えば、キリストをだ。

「神を愛する者、キリストを愛する者、神に愛される者、キリストに愛される者には」
と言つてもいいほどなんだ。

そんなところは弾力性を持っているからね、パウロの言葉は。パウロに、
「もう一遍、ローマ書を書いてっらん」



と言っても、パウロは書けはしないよ。また別なローマ書を書いてしまう。そりやそうだよ。妙なもんだね、真理というものは。その時その時に書くと、別な表現になってしまう。同じことを言っても、別な表現になるけれども、ダイヤモンドと同じでね、同じ光が赤に光ったり、黄色に光ったり、青に光ったりする。もとはダイヤモンドの無色なんだ。そういうわけであります。

「一切のことは結局、最善になっていくぞ、一切はベストになっていくぞ」
と。これはブラウニングもそういうことを言っている。

「勇者には最悪は最善となる」

と。体験の仕方一つだと。

「キリストを愛する者、キリストに愛される者には、一切のことは最善になって行く」
と、こういうわけだ。「最善」というのは、何も自分が幸せになるということではない。

「神さまが、これが一番のことだと言うことになっていく」

ということですよ。まず、福音の世界は盛んなるかな。

●予知・予定・召命・義認・栄化

29 神は予^{あらか}じめ知^{かたち}りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。

神の像^{かたち}がキリストだから、今度はキリストの像が我々だ。「知り、予定し」と。これがカルビンの「予定説」が出てきたところの言葉です。

これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子^{ちやくし}たらせんが為なり。

その通り。

30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

何段階にもなっているね。知り、定め、召し、義とし、光栄とする。五段階になっている。「五段階」なんていうと、すぐ成績のことになる。いわゆる「落ちこぼれ」とか何とか、嫌な言葉だけれども。「落ちこぼれ」でも何でもない。そういう方面に才能がないというだけの話だ。それを「落ちこぼれ」なんて言う。誰だってみんな「落ちこぼれ」を持っているんだよ。どれもこれも良いなんていう秀才は、あんまりいただけないね。中心がなくて、どれもこれも良くて結構ですけれども、しかし、「私の中心はこれです」というものがなければダメなんです。

私なんかは中学時代は、化学は嫌いだったね。化学は落第点をとった。高等学校に入ったら、政治経済が嫌いだね、これがダメだった。私は法学部なんか入ったら、万年法学生で出られやしない。私の従兄弟はみんな法科系統なんだ、この私の兄貴からして。私だけが文科なんだ。



「予知・予定・召命・義認・栄化」

とパウロは五段階にものを言っている。これはパウロも言っている、

「生まれない前さきから選ばれた」

と。それは予知されているから。予知と予定はすぐついている。エレミヤもそうだ。

「胎を出でざる前からエホバは我を選ばれた」

と。予選だ。私たちは、私たちの側のいかに拘らず、何か知らんけれども、こういうことになってしまった。それは神さまが予知、予定してくださった。こつち側の話ではない。神さまの方の計画なんです。いろんな人を選ぶ。むしろ、そういう人は、パウロがコリント前書1章で言っているように、この世ではダメなように思われるような落ちこぼれだ、我々は。落ちこぼれが、落ち穂拾いみたいに、そのように選ばれた。

「イスラエルはダメな頑かたくな小さな民だから、私は選んだ」

と申命記に書いてある。ありがたいね、これは。キリストが選んだのは、みんな漁夫みたいな無学の凡人ただびとみたいのが選ばれた。

「弱き者、無きが如き者を選んだ」

と、パウロは言っている。そうかと思うと、パウロみたいな優れたやつもいるよ。けれども、角度が悪かったから、いつペンひっくり返された。「そのまま良い」なんて言わないんだ、キリストは。

「とんでもないぞ、お前は」

と。そして、今度は本当に召命を受ける。召命を受けるときに、本当にこのバプテスマを受ける。聖霊のバプテスマがそこにやって来たらしめたものです。本当の召命はそうだ。聖霊のバプテスマを伴うと、その時にハッキリと召命を受けたことが分かってくる。

「義認」という言葉は私はあまり好きではない。「義とされる」ということはキリストの義をいただくんだ。義認とはもともと法的な言葉だ。そういうところからパウロが引用したんだから、仕方がない。義とされる。信仰によって義とされる。キリストの義をいただく。神・キリストと義の関係に入る。

「縦の関係に入りました。そうしたら今度は、キリストの実質がやって来ました」ということ。それが栄化だ。ピリピ書の、

「栄光より栄光に、遂にキリストの姿に化するなり」

というのがこれだ。

御子の像かたちに、姿に化せられていく。みんなそれぞれの、一人びとりの姿ですよ。M君とというのは、世界に一人しかない。その顔も他にいない。その指紋もその他にない。そういうように、一人びとりは絶対特殊に造られている。これを人格的存在という。それが、その特殊性をハッキリ持ちながら、キリストの姿となるという。キリストの姿が、M君にはM君を通して現れる。K君にはK君を通して現れる、キリストの姿が。



「キリストの姿に化せられる」

というと、みんな同じキリストになってしまいか、みんな同じ顔になってしまいかというと、そうではない。キリストの姿は千変万化、その一人びとりにおいて現れている。これが

「キリストの姿に化せられるなり」

ということです。間違えては困る。我々はいよいよハッキリと神さまの芸術的作品なんだから。一人びとりは他のものと掛け替えないようにできている。活ける芸術的作品なんだ、一人びとりが。だから、キリストの内的な相がいよいよその人を通してその人らしく現れる。こういうわけです。

●神の栄光のため

太陽の光が、バラはバラらしく、紫陽花^{あじさい}は紫陽花らしく現れている。それと同じことだ。それで百花繚乱に咲いている。交響楽だつてそうです。全部の音が、いろいろな楽器があつて、それが大交響楽となる、大ハーモニーとなる。こんなわけが分かったことはないのにね。世界はおかしいよ、宗教は何か特別なもんだと思つているんだ。

ソ連はソ連らしく、中国は中国らしく、日本は日本らしく、それぞれの在り方をもつてやっていく。ただそこに本当に人間性があるかということ。全部、人間です。人間性は、絶対的なものを受けとるまでは、本当の人間性は出てこない。あらゆるイデオロギーを超えろということです。そして、イデオロギーをそれぞれの限界において発揮すればいいだけのハなし。もう自ずから平和にならざるを得ないんだけど、それができないというところに、その大事な消息を欠いている。

また、宗教の世界で、

「いや、私はマホメット教だ。私は仏教だ。私はキリスト教だ」

と、また宗派争いをする。みんな間違つていて。そういう大きな気持ちはどうして持てないんだろうね。これはどうしても、私は『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻 1980年刊）でそれを書かざるを得ない。ただ、キリスト教の中の小さな、ほじくつたような神学を書くんじゃないですよ。それを「神学」と言うか何か知らんよ、私は。

そういうことで、ロマ書8章の中間で、パウロが本当に三重の呻きを語り、そして、私たちがこの聖霊の呻きをもって、本当に希望を宿して進んでいく。遂にそのパウロが一番終りで、そのような栄光の姿に化するというところに凱歌を上げたのは、神・キリスト中心の故の我々の姿であつて、我々の救いのためではない。神の栄光のためであります。

